

### 話題の人にインタビュー

## 「いのち」の輝きを伝える彼の言葉が、誰の心にも響くのは、最愛の娘から託されたメッセージだから……。

### 「いのちをバトンタッチする会」代表 鈴木中人氏

わずか6歳の愛娘、景子さんを、小児がんで亡くされるという悲しみを経て、今、全国の子どもたちに「いのち」について講演活動を続ける鈴木中人さん。体験をもとにした「いのちの授業」は、5年間で12万人が参加し反響を呼んでいます。

#### Q.「いのちの授業」とは？

「いのちの授業」の大きなテーマは、死と向き合うことです。生きることで死ぬことは別々なことではなく、死を見つめることが、いのち、生きることを深めることになるからです。

「いのちの授業」では、精一杯生きた娘、景子と、それを見つめる私たち家族の姿をありのままに語っています。生き抜くこと、支えあうこと、ありがたさの気持ちを持つこと、大切さを伝えます。



プロフィール  
すずき なかと  
92年長女の小児がん発病を機に、小児がん支援活動や「いのちの授業」などに取り組む。著書に「いのちのバトンタッチ」(致知出版社)、「6歳のお嫁さん」(実業之日本社)

Q.いのちを粗末にする犯罪や自殺などが増えています。その原因は、様々な要因が複合的に絡み合い、これが原因だと言では語れませんが……。ただ、いのちの尊厳、重さ、はかなさを実感する機会が減っています。

昔は日常の中に、死と直面する機会がありました。たとえば、人が年老いて逝く、遺された人が涙する、その様子を目の当たりにするのは普通の出来事だった。子どもの頃の実体験と、テレビなどで見て知っていると、この知識、その感覚には隔たりがあります。

子どもがリアルな死を体験するとき、いのちや死について、大人が子どもに分かる言葉で言い添えてください。体験と知識が重なり、子どもの心に刻まれていきます。

Q.私たち親は、子どもたちにもどんな働きかけをしてやればよいのでしょうか。

私たちは、いのちというものを人と人とのかわり、特に家族の中で感じます。また、いのちを大切にすることを育てるために一番重要なものは愛情です。ですから、自分自身が家族から愛されているという実感を子どもに与えることが絶対に必要です。愛された人は、人を愛し、支えることができるようになっていきます。

しかし、愛情だけでは子どもの心は育ちません。聖書や仏教経典には、心を導くために必ず愛情と戒め、その両方が書かれています。子育ての中にもその両方が必要なのです。例えば、母性的なものとして、優しさや愛情。父性的なものとして、公やみんなのことを考える、といったことです。性別差や外形的な家族構成を申ししているわけではありません。

たとえば、電車に乗ったとき、子どもは窓の外の色を見るために、座席に後ろ向きに座りたがり。昔は親が、靴の汚れがつかないように靴を脱ぎなさい、と教えたものです。今は、隣に親がいても平気で靴をはいている子どもをよく見かけます。

「窓の外を見せてあげよう」という優しさが「母性」、電車の中で周りの人に迷惑をかけてはいけない」という公の意識づけが「父性」です。親は、子どもにとって最初の社会の姿です。ただ子どもは、良いことをさせるだけでなく、悪いことを示す、そのバランスが必要ではないでしょうか。

#### Q.子育て中のお父さんお母さんにメッセージをお願いします。

今、「これで問題解決」といった本が人気ですが、簡単に解決できないから、みんな悩むのです。「父親として」「母親として」子どもに何をしたいのか、どうしたらよいだろうか、葛藤すること、それ自体が大切なことです。その中で、自分流の子育ての知恵が生まれ、親になつていくように思います。答えを求めているだけでは親にはなれません。

### 親子で読書

冬休みに親子でじっくりと読んでみたい本を三冊ご紹介します。

寒い日は、あたたかい部屋で読書を楽しんでほしい。まず、『てぶくろがいつぱい』は、やさしい絵とたくざん人の親切が、あたたかい気持ちにさせてくれる絵本です。近所の男の子がてぶくろを片方なくしたと知った人たちは、落とし物のてぶくろを見つけると、次々と男の子の家に届けました。てぶくろをいつぱいもらった男の子が思いついたすてきなアイデアとは？小学校低学年から楽しめます。

次の『火曜日のごちそう』はヒキガエルは、「ヒキガエルとんだ大冒険」シリーズの第一巻です。冬のある日、ヒキガエルのウオートン、スキーをはいておぼさんの家へ行く途中、ミニズクにかまってしまう。ミニズクの家に連れて行かれ、六日後の火曜日は誕生日のごちそうとして食べられることに……。ウオートンは逃げ出すことができるのか、食べられてしまうのか、最後まで目が離せません。小学校中・高学年向きです。

最後は『獣の奏者(そうじゃ)』です。主人公の少女エリンの母は、鬨蛇(とうだ)というどう猛な獣の医

術師でしたが、鬨蛇の原因不明の死の責任をとらされ、処刑が決まります。そして、死の間際、母はエリンの命を助けるために鬨蛇を操る指笛を吹きました。母の姿が忘れられないエリンは、成長すると、王獣(おうじゅう)とよばれる翼をもつ獣の医師になることを決心します。アニメ化もされ、小学校高学年から中高生、大人まで、幅広い年代の人に読まれています。

「ヒキガエルとんだ大冒険」シリーズは七巻、「獣の奏者」シリーズは四巻十外伝一巻が出ています。シリーズをまとめて読めるのも、冬休みの醍醐味ですね。(名古屋市鶴舞中央図書館)

→『てぶくろがいつぱい』  
フーレス・スロポドキン文 ルイス・スロポドキン絵 三原泉訳 徳成社

→『火曜日のごちそうはヒキガエル』  
ラッセル・E・エリクソン作 ローレンス・デイ・フイオリ絵 佐藤涼子訳 評論社

→『獣の奏者(そうじゃ)』  
上橋菜穂子作 講談社

